

# どんな障害があっても一人の市民

～ふつうに暮らせるまちづくり～

宮 川 齊

(みたか共同作業所むうぶ舎／地域精神保健社会福祉協会 (CMSA))

三鷹からまいりました。先程、この会合の前の昼食をとりながらの打ち合せでもちらと申し上げたのですが、何となくこの場で発言することのぎこちなさを感じています。それは精従懇という団体が非常に専門家の多いことと関係があるかもしれません。私、専門家と聞くとすぐ、昔、たしか片桐ユズルという詩人が“専門家は保守的だ”とうたったことがふと頭をよぎってしまうのです。

ただ、昨日一日ここで話を聞いていてチラと、時代の流れかなあと感じました。私の所属しているのは地域精神保健社会福祉協会 (COMMUNITY MENTALHEALTH SOCIAL-WELFARE ASSOCIATION) といいますが、コミュニティメンタルヘルスという言葉がたくさん聞こえたからです。

こんなことを前置きにお話を始めたいと思います。

私の話のタイトルは、司会の神さんとの話し合いの中から私の中に浮かんできたものです。言ってしまうと、これが目標であり結論であるようなタイトルです。

## 1. 三鷹市～こんな街からの報告です

いまから話しますのは、医療とか保健とか福祉とかの方法論としての抽象的な“地域”ではなくして、私の暮らしている三鷹の街の具体的な報告です。

この街は発展する新都心新宿から JR 中央線に乗って西へ約20分、23区と多摩の接するとこ

ろです。いろんな意味で狭間という感じがします。面積約16km<sup>2</sup>、東西約5km、南北約4kmくらいで、自転車でぐるぐる回れる規模の街です。人口約16万人。これ以上増えると困るけれど、結構体力のある大きさです。今年度の予算は一般会計570億円くらい、そのうち福祉関係が32.3%と割りと多いと思います。過去において結構福祉に力を入れてきた街です。

20年以上前からコミュニティ行政というものが発達しておりまして、市域を7つに分け、住民協議会が作られ、コミュニティセンターがあります。それぞれに年間約1億円の予算が市から出され、そこを基本的に住民が管理する実質的な自治区が作られています。また、基本計画や福祉計画が立てられるときに市民会議という方策をとり、市民の意見が反映するような仕組みを採用しております。

私がいま三鷹の街のことをやや詳しく話したのは、私達の運動が街の在り方と密接に結びついているからです。

精神保健関係についてお話しますと、この街は精神病院が多いのが特徴です。16万人の人口に1300床、人口比では全国平均の3倍くらいではないでしょうか。たぶん昔、田舎だったからたくさん出来たのだと思います。市民はこれを知りません。

いま、1300床という言い方をしました。この世界ではそういう言い方をするので言いましたが、実はこの“床”という言い方は何となく私の感覚に合いません。ベッドというのは眠ると

ころだと思うのです、夜に。病院のベッドというのは、そこに横になっていないといけない状態だから、入院してそこにいるのだと思います。ところがこの商売に入って病院に行ってみますと、寝ていない人が大勢いるわけです。あるいは寝ていたくもないのに寝かされている人がいる。普通に考えて10年もベッドに寝たままということはないでしょうから、“1300床”という表現をすること自体に非常な違和感を覚えます。

87年まで、地域の病院以外の社会資源は「三鷹保健所のデイケア活動」以外にありませんでした。88年に、市内最初の精神障害者共同作業所が市民運動から生まれ、同じ年に家族会が発足しています。これはいずれも全国的にみて決して早くはありません。しかし、91年に作られた2000年までの現在の市基本計画には「精神障害者の自立促進」という文言がきちんと入っています。これは全国的にみて早いと思います。それは先程述べましたように、基本計画を作る時に市民参加のシステムが比較的早い時期からある程度機能していたことを意味していると思います。市民参加や福祉の土壤があるため、いったん動きだすと早いのです。現在、様々な運動の中で自治体の基本計画に精神の問題をきちんと位置付けようという流れがありますが、三鷹では91年に出来た現在の基本計画に既に精神のことが入っています。そのため予算などが比較的早くきちんとついています。

92年から、社会福祉協議会に「精神保健ボランティア講座」が開講しました。これも全国的にみたら決して早くはないと思います。これは私も関わっていたボランティア活動推進協議会で、今後はこの分野のボランティア活動が必要だと提言し、実施されたものです。以後、毎年開講され、現在3つのボランティアグループが

生まれ、活動しています。88年から10年経った現在、精神障害の作業所が9箇所になりました。人口比では都内最高の設置率だと思います。補助金も10年前は市独自のものはありませんでしたが、現在では都と同額及び施設整備費で、Aランクでは総額年間約3,000万円、都内最高クラスだと思います。市民の動きとそれに応えた行政の成果です。しかし、法的な裏付けがないものですから、常に私達と行政との力関係の上に成り立っているとも言えます。そのため折々に請願を出したりしています。96年には、市基本計画（改訂）にあたり「精神障害者施設の整備・充実」が加えられました。

97年、統廃合で三鷹の保健所が無くなりました。お隣の武蔵野になったわけです。ちなみに人口は三鷹が約16万人、武蔵野が約13万人ですから、両方合わせるといわゆる二次医療圏の約30万人になります。精神保健に対してそれなりのことはやっていますが精神保健のマスタープランは三鷹にありません。そのため、熱心な職員はいますが、その熱心な力が今後どのような方向に向かっていくか、危惧せざるを得ない部分がございます。市民の健康を守る自治体の姿勢が問われます。

## 2. 「精神障害」との出会い～むるっく相談室で

さて、10年前に三鷹で精神障害者の作業所がどうして生まれたか、お話ししたいと思います。

85年、13年前ですが、三鷹の中で消費者活動や自然保護運動、障害者運動、あるいは労働運動など、いろいろなことをやっている人間が「たべもの村」というレストランで交流会をしていく中で、自分たちの街のことを余りに知らないことに気づきました。逆に言えば、暮らしの基盤である地域、具体的には基礎自治体に気づい

たわけです。市部とはいえ23区に隣接し、都市化が進んでいて、お互いが孤立して住んでいる。ちょっとした困ったことにも相談する人がいない。行政に相談窓口はあるが敷居が高い。そういうことが出てきて、私達はボランティアで市民相談活動を始めました。孤立化した都会の暮らしに人々のつながりを作りたい。だれもが暮らしやすい街を自分たちの手で作ろうというわけです。一月1,000円の会費で、最盛時には百数十人の方が会費を出して下さり、マンションの一室を借りて、一切無料、何でもどうぞという市民の市民による市民のための相談室を始めました。専門家の弁護士や医者、教師が色々アドバイスしてくれました。

相談活動が続ける中で、心の病が非常に多いことに気づきました。3割以上です。その時点まで三鷹にこんなに精神病院が多いとは知らなかったのです。私達は相談活動の中で一つのニーズを発見し、その解決のため精神科医を招いたり、保健婦やワーカーを招いて勉強会を始めました。市の職員にも参加を呼び掛けました。こういった中でよその街には共同作業所というものがあることを知ったのです。私自身も病む可能性がある、そして私が病んだとしても、私はこの三鷹ですっと生きていきたいと思っています。そこで私達は生きられるための方法の一つとして作業所を作ろうと考えました。87年夏、「三鷹に精神障害者の共同作業所づくりを進める会」が発足し、88年に私達の作業所が生まれたわけです。

### 3. 障害を持ってこの街で～むうぶ舎の歩み

10年前、発足にあたり多くの人間が何日も何日も夜遅くまで話し合い、理念としていくつかのものにまとめました。

その一つが出会いと憩いの場、二つ目が生活体験の場、三つ目が働き場の場です。この三つは狭い意味でのいわゆる作業所の働きだと思いません。しかし、作業所の中で職員とメンバーとが相対して気持ちの良い空間に浸っているだけでは何も変わらないわけです。また、作業所だけで生きられるものではありません。私達は市内関係機関のネットワークづくりを四番目の働きと考えました。同時に、関係者だけの間につき合っているのは普通の暮らしではありません。ですから、三鷹の街のすべての人が精神障害について理解してくれる道をめざす働きも私達の仕事だと考えました。

こういった五つのことを話し合っ始めたわけですが、10年経って、そんなに間違っていない方向だったなと感じています。

普通、暮らしについて衣食住という言い方をしますが、私達は医衣食職住友遊とっています。こうしたものをどうやったら自分のものとする事が出来るか、それを基本に活動してきました。

当初、作業所自体、場所を借りることが困難だったので一戸建の事務所をもつボランティア団体の事務所に間借りして始めました。カネとヒト求めバザーを行い。精神保健への理解の機会ともしました。90年には自前の事務所を得て移転し、メンバーが増えてきた93年には第二作業所を作りました。その時、性格づけをしました。一つは比較的ゆったりした時間の流れる、病院から戻ったばかりの人にも入りやすい“憩いの手づくり工房”です。ただ世間の風も入りにくくなりますが、そういった場所も必要ではないかということです。もう一ヶ所は“リサイクルショップ”。バザーをやって最高は200万円を越えたときもありますが、その残り物が案外売れる、そこで大家さんの理解の下に建て替え

の時、店舗形式にしました。精神作業所などという看板を出しているわけではなく、世間の人々が自由に出入りできるショップです。最初はカウンターでうつむいているだけだったメンバーが次第に顔を上にあげ、やがては結構面白い冗談をお客さんと交わすようになっていきます。この頃、広く市民に向けた心の電話相談室「めんたるこーる」も開設しました。

96年、私達はコンセプトをはっきりとさせた三つ目の作業所を作りました。メンバーはかなり仕事ができます。少々の支えがあれば、相当のことができるのです。しかし、アルバイトの試験を受けにいったら落ちて帰ってきます。たまたま入っても、食後に薬を飲んでいてそれは何なんて聞かれると、相手に他意はないのですが、それでぎくくとして翌日から行けなくなってしまいます。社会が変わってくれて、もっと企業が受け入れてくれればよいのですが、そうならない現状では作業所制度を活用して一般の職場に近いものを作ろうと考えました。それがレストランの食茶房むうぶです。

私は90年の初夏にイタリアのトリエステに4日間いました。北イタリアの五月は非常に良い季節で晴天が続いていましたが、朝から夜遅くまでフランコ・バザリアのあとを辿るように街の中をぐるぐる回りました。そこで出会った素敵なレストランが私の頭の中にしみついていた。病院を開放して街に出ていったメンバーが食事をする場所であり、街の誰でもが入れるとっても素敵なレストランなのです。

メンバーの仕事を作るにあたって、いったい何の仕事が良いかと考えました。物を作るのも良いのですが、ずっと買ってくれないと困ります。販路を永久に拡大しないとなりませんから。しかし、人間であればかならずものを食べます。食べ物はしっかりしたものを食べたい。そうい

うことで、私の頭の中のトリエステのイメージ、そして職員でとても食に関心を持っている者がいて、レストランを作ることにしました。

レストランを作るにあたって、食事を扱っている作業所だけでなく世間の普通のお店もたくさん見学しました。また、決まった場所の周囲の食べ物屋の味と値段、雰囲気などを調べ、マーケットリサーチも行ないました。そんな風にして作り出したレストランの工賃の目標は500円としました。売り上げによる変動制で、スタート1年後の目標です。一般のごく普通の方は笑うかも知れませんが、作業所の現実をご存じの方は逆に驚くかもしれません。私達の従来の工賃は100円台から200円台です。500円というのはかなり冒険の目標でしたが、最初の年の3ヵ月目にクリアしました。現在、2年目ですが700円を越えることがあります。お金だけじゃないよという方もありますが、お金は非常に大事です。多様化するメンバーのニーズの中で“働きと出会い”にポイントを絞った第三作業所が「食茶房むうぶ」です。命の源の“食”を職として、会合の出来る和室やギャラリーを設け、コンサートなども行なっています。

お店という形はすごく良いと思います。メンバーは一般にコミュニケーションに不得手ですが、不得手だからといってクローズドな場所にいるのではなく、むしろ世間の風に吹かれていくと結構出来るのです。習うより慣れろだと思つづくと思います。

私達は街の中で街の一員として生きることを考えの基本に置いています。先程、申し上げた地域の住民協議会にも参加し厚生部会の役員をし、運動会や盆踊りなどに参加しています。リサイクルショップは地域の商店会の会員となっていて大売出しなども一緒に行ないます。また、三鷹市の計画作りなどにも積極的に参加

し、発言しています。

#### 4. 障害を越えたつながり～街を変えるために

世界全体が幸福でなければ私は幸福ではない、と言ったのは確か宮沢賢治だったと思いますが、私達の仕事もそうだと思います。現状を良くするには自分たちのことだけでは駄目です。私達はベースを基礎自治体である三鷹市と考えていますので、三鷹市を良くしなければうちのメンバーは幸せにならないと、市の基本計画や福祉計画の策定に積極的に参加しています。

90年に、市の基本計画（1991～2000）策定を前に、“障害者も一人の市民として計画に意見を”反映させようと、西三郎氏と私が市内の様々な障害者団体・作業所に呼び掛け「三鷹市障害者福祉懇談会」を結成し、意見書を提出しました。しかし、私達の狙いはそれだけではありませんでした。普段の自分の仕事だけで精一杯で、横に結びついていかない障害者団体をつなげていこうというのが本筋でした。懇談会は会合を定例化して組織化し、障害に関わる団体・個人の連絡機関として成長しました。92年の「福祉プラン21」の策定に際しては、存在を認められ計画案検討市民会議委員を出しています。そこから仕事を受注するため「三鷹市障害者ワーククラブ」が生まれました。市より公園清掃や市

役所内の売店の経営を受託、また新しく出来た高齢者住宅1階に喫茶店開設し運営に奮闘中です。

最初にお話しましたように、私は精神保健プロパーの人間ではありません。私が話しているのは精神保健だけでなく、むしろまちづくりの話です。一人の人間として安心して生き、暮らしていける街をどうやって作るか、これが私のテーマです。そういった意味で私達の仕事が必要とするのはまず常識です。次に地域の知識、そして専門領域の知識です。

保健から見たとか、また医療や福祉から見たとか、そういった色々なモデルがありますが、そういったサービスを統合し体現して生きる主体としての生活者、市民としてのモデルがあって良いと私は考えます。

タイトルにかかげた“どんな障害があっても一人の市民、普通に暮らせるまちづくり”は、これを翻訳するとノーマライゼーションになると思いますが、このほんとうの実現はたやすいことではありません。しかし、その方向性をもって進んでいくと、その過程で様々な出会いがあり、様々な学びがあり、生きていて良かったなど思わせられることがたくさんあります。私はそういった希望に向かってこれからも進んで行きたいと未熟ながら思っています。

精神保健への幅広い理解を  
広げようとする市民会の地域の  
中に広がる人のつながりの輪  
をユニークな活動を通して紹介しよう

全国事例の大バナー!!  
参加団体は10を数え、にぎやか  
かな祭りに色彩をそそぎます。  
・MAM・三鷹市御酒会・老い友  
・七ツト・たへ・和村・アソビ  
会・親の会・西市民会館...

新川源住民協議会  
厚生部会のメンバー  
そして、コミュニティセンタ  
では、月/回、ユースと  
メンバーが楽しんでい  
やっています。

公南会  
新川中原地区の  
商店会に加盟

みたかホステル  
おいしい会  
月初の土曜  
日に集まっています。

精神保健を学ぶ集い  
毎回テーマを持ち、大きく精神保健への関心を  
呼びおこそうと、「あおき会」と共催で行って  
います。御酒会、シンデレラから、当事者が  
生の声で語る場となっています。

中原店 1988~  
〈超いのちの工房〉  
自主活動  
自然と  
成長と  
再生  
下請け仕事  
若者としてのホトとできるくつろぎの空間

またか共同作業所  
三鷹市福祉会  
毎月1日は  
みんがで、夕飯会  
市民活動の中から芽を出し  
たものが合にはゆるやかな  
人のつながりの輪が広がります

三鷹に精神障害者の共同  
作業所をつくり進める会

またか保健所  
あおき会  
三鷹市福祉会  
第4木曜日

参加しています  
三鷹市障害者福祉懇談会  
三鷹市障害者アソビクラブ

連雀のミニセンター  
ハダシ音楽会  
カレカ(音楽隊)  
ハーブ・韓国舞踊...  
アマチュアバンド  
舞いも  
木登り

めんたろこ  
〈心の癒し工房〉  
Y.ス.エ  
10:00~2:00

食茶房むうば1996~  
〈癒しと出会いの場〉  
食をベースに行う集い活動

地域精神保健  
社会福祉協会  
(CMSA)

社会教育会館  
おいしい会  
二葉会  
奇祭りの最終  
日に集まっています。

「おいしい会」,  
「二葉会」の活動と連携  
しています。

センターでの「精神保健ボランティア講座」  
から誕生。カツ井・5らし高司・豚江...  
デザートもつく気配りのメニュー、おいしい  
食事のもとに、当事者、家族、ボランティアが  
集まっています。